

九州学園福岡女短大 塩塚 瑞枝

1. 19C 初頭、古典的衣装の一環として、簡素な美しさを見せたエンパイアスタイルは、略、1815年以降、次第に異質の要素を交えて衣装様式美の混乱を見せ始める。その異質の要素とは過去の衣装の造型意匠乃至美を指し、変容はそのリバイバルに負うところ大である。服装史の19Cは王政復古調、ロマンティック、クリノリン、バスル等の衣装様式別に細分し考察することが常道のようにであるが、私はこれらの衣装を一括して古典的衣装に対立する浪漫的衣装として考察し、古典的衣装からの変容の内に18C ロココ的美がどのように復活していったかを探り、その意義を考えてみたい。

2. 美術、各種服飾史掲載の挿絵等具体的資料を基礎に、和洋の服飾史、文学、美学美術史書、精神史等によって理論の展開を示した。

3. ロココ調衣装美の復活は部分的にスカート幅の拡がり、裾の装飾、コルセットの使用等漸進的に古典的衣装からの飛翔が見られ、1830年を中心とするロマンティック衣装、1850年代のクリノリン時代、1860年以降のバスル時代へと移行して行くが、それらの衣容はロココ美を創造的に復活しようとする衣装自身の自律的展開であると同時に他の文化現象、美術、文学思潮、その他の時

代思潮の中に、或は、当代の生活現象を通して、それらを支えたものを検討しつつ、その服飾史的意義を明らかにした。